

11月4日(土) 研究発表4 第2室(107)

日本人英語学習者のメンタルレキシコンを探る
 —語彙サイズと連想量を手がかりに—
 A Study of the Mental Lexicon of Japanese EFL Learners

菊池真理(神戸松蔭女子学院短大・大学)・谷村 緑(大阪外国語大学大学院)

藪内 智(大阪大学)・山本みどり(立命館大学非常勤)・吉村満知子(京都教育大学非常勤)

研究の背景

「連想法」を用いた研究は心理学の問題領域では非常に長い歴史をもつものだが、この手法は言語学研究の分野でも言語材料の分析に取り入れられ、次第に重要な問題領域を占めるようになった。この連想法を取り入れた言語分析は、無意味綴りを基にした連想価の測定から有意味語を用いた調査へと研究者の関心が移っていった。

日本では梅本堯夫を中心とするグループが1962年に1000人の大学生を被験者とし、210個の刺激語を用いた有意味語の連想調査を行なっている。彼らの主たる目的は自由連想の標準化であり、その調査で得られた結果を言語学習の研究や言語心理学的な分析等に用いることであった(梅本、1969)。

一方、言語心理学の分野では言語学習や記憶は体制(organization)を形成する過程であるとその重要性が指摘されて以来、体制化の研究が数多くなされるようになった。中でも群化(clustering)の研究が最もよく行なわれた。更にこの群化の現象も項目間の連想を重視する連想的群化、カテゴリー的群化、被験者独自の主観的体制化に分けて考察されるようになった。

今回我々は日本人英語学習者の習得語彙体制化の過程を考察する目的で、カテゴリー語及び具象語・抽象語を刺激語として用いた自由連想法による調査を日英二か国語で行なった。また、同時に行なった英語語彙レベルテストの結果との関連性を検討し、日本人英語学習者のメンタルレキシコン体制化の問題を考える一助として、自由連想により生じた反応語を量的に分析した。

1. 研究の目的

- (1) 連想テストと英語語彙レベルテストとの関連性の検討。
- (2) 語彙カテゴリー語(第一群)を刺激語とした反応語と具象語・抽象語(第二群)を刺激語とした反応語の産出量の比較。
- (3) 第二群を刺激語とした場合の具象語、抽象語それぞれが産出した反応量の比較。
- (4) 上記(2),(3)において刺激語を日本語とした場合と、英語とした場合の反応語の現れ方の比較。

2. 方法

2.1 被験者

日本人大学生約500名および高校生約160名。男女比は差がなるべく少なくなるように配慮した。

2.2 刺激語の選択

研究グループのパイロットスタディの結果を踏まえ、「JACET基本語4000」を参照して選択。特に出現頻度が低く、難易度が高い(第4、第5レベル)と思われる

る語は排除した。刺激語は全部で20語とし、10語は意味カテゴリー語(第一群)、10語は具象語・抽象語(第二群)とした。なお具象語・抽象語の選択については、梅本堯夫の調査(1969)を参考にした。

2.3 調査方法

調査実施校をA、B2つのグループに分け、各々のグループに第一群、第二群の語を刺激語とした自由連想を行なわせた。A、B両グループにおいて、日本語と英語双方による調査を行なったが、各グループの被験者をさらに2分し、実施の手順を、英日で行なう被験者群、日英の順序で行なう被験者群とし、カウンターバランスを計った。この日英二か国語による2回の調査は3週間以上の間隔をあけて行なった。また初回テスト時、連想テスト後にNation(1990)のA Vocabulary Levels Test(約15分)を行なった。連想テストは練習問題(約30秒)、本問題(各10問、一問2分、一問につき連想語記入欄25個)の手順で行い、英語によるテストでは最後に日本語訳を記入させた。

2.4 テストの処理

連想テスト結果の処理に当たり、刺激語を英語とした調査で日本語訳を誤ったものについてはデータから除外した。

3. 結果の分析

- (1) 語彙レベルテストの得点数が高い者ほど英語を刺激語とした場合の連想量が多い。(レベルテストの結果を成績上位群、中位群、下位群に分けて考察)
- (2) 第一群を刺激語とした場合、使用言語による産出量の差は大きくない。
- (3) 第二群を刺激語とした場合、使用言語による産出量の差が見られる。
- (4) 刺激語を英語とした場合、第一群が第二群より産出量が多い。
- (5) 刺激語を日本語とした場合、第一群と第二群の産出量の差は少ない。
- (6) 日本語、英語のいずれにおいても具象語を刺激語とした場合の方が抽象語を刺激語とした場合より連想量が多い。

4. 考察

刺激語を英語とした場合にのみ、第一群の方が第二群より産出量が多いという現象は、被験者が過去に受けた英語教育の教授法、或いは学習法の影響である可能性がある。抽象語の方が具象語より連想語彙のネットが形成されにくい傾向がある。

参考文献

- Ishihara, Kenji, Tae Okada, & Shimpei Matsui. (1999) English Vocabulary Recognition and Production: A Preliminary Survey Report. *Doshisha Studies in Language and Culture*, 2 (1), 143-175.
- 梅本 堯夫 (1969) 「連想基準表」東京大学出版会.
- Nation, I.S.P. (1990) *Teaching & Learning Vocabulary*. Heinle & Heinle Publishers, Boston.